岡豊風日

〈高知県立歴史民俗資料館だより・おこうふうじつ〉 第49号 2003年12月1日

資料見聞

突盔形の兜

当館には、突盔形の兜が2点収蔵されています。突盔とは、尖った兜という意味で、その形によって柿形・錐形・筆頭形・角先形・帽子形・嘴形・椎形などの種類があります。

日本甲冑武具研究保存会の竹村雅夫氏は、「軽量であると同時に強靱で、主に室町最末期（永禄・元亀年間）から桃山期に西国を中心に流行した兜」と結論付けています。[1]

左の写真は、十二間黒漆塗突盔形筋兜といい、長宗我部元親の初陣に関わる奉納品として永く土佐神社に伝えられてきました。

土佐神社蔵（現在、当館3階総合展示室戦国コーナーに展示中）

最近、この兜と寸分違わぬ兜が他にも現存していることが確認され、オーダーメイドではなく、量産型であったことが判明しました。

元親の関係資料ということで、初陣の際に量産型のような兜を奉納するはずがないと思われる方もいることと思いますが、初陣だったからこそ、父国親の意向で当時最新の突盔形を選んだとも考えられます。

六枚張突盔形兜　個人蔵　紫糸威二枚胴等の付属品が付く。天正14年戸次川合戦従軍時に西村吉太夫が身に付けていたと伝える。

また、通常武家の初陣では、先祖伝来の甲冑を身に付けることが多かったようですが、長宗我部家一七代当主元門の時、「家中錯乱」によって「…重書以下紛失之所…」[2]という状態になってしまったこと。一九代元秀（兼序）の時に、岡豊城が落城し、相伝の家宝の大半が失われたと思われることなどにより、初陣に着領できる古式な甲冑がなかったと推定することもできます。

元親初陣当時の長宗我部氏は、せいぜい一、二郡を制していたにすぎず、国人領主の奉納品としてはまず妥当なものだったと思われます。

ちなみに、高知市長浜の元親の銅像は、この突盔形の兜が根拠となり、甲冑全体のトータルイメージが作られました。

銅像を見る機会がありましたら、一度兜部分に注目してみてください。

長宗我部元親初陣像

註（1）竹村雅夫「『突盔兜』と周辺の諸問題」（『甲冑武具研究』一二四号）

（2）「秦氏系図」（『土佐国編年紀事略』）

（野本亮）

招待席

どこかで会った気がするのに

高知女子大学・大学院助教授　青木　淳

この人と、どこかで会ったような気がするのに思い出せない。年齢のせいだと言われたら仕方が無いが、大学に勤めていると授業だけでも年間に数百人の学生たちと出会う機会がある。一生懸命名前を覚え、全ての学生の表情を見ながら授業をしているつもりなのだが、こんどは顔と名前が一致しない。ところがそのうちに、名前すら忘れているのに、出身地や好きな食べ物、兄弟のことなど授業とは関係のないところで私と話したことの記憶から、再びその学生のことを認識できるようになっていることに気がついた。

仏像の研究をはじめて、気がつくと二〇年の歳月がたった。たぶん私が出会った仏像の数は、中国や韓国、それにヨーロッパなどでの調査を含めたら、およそ数千体にのぼるはずだ。大学生の頃、大豊町の豊楽寺や定福寺、安田町の北寺などの仏像を、一生懸命バスを乗り継いで見て歩いた思い出がある。そのころのノートが偶然、東京の実家に帰った折に出てきて、懐かしく手にとって眺めてみた。そこには、土佐の仏像にはどこか独特な雰囲気のある顔立ちがあること、目鼻立ちや、耳の彫出の仕方には京都や奈良の仏像には見られないユニークな表現の仕方のあること、そして普通では参拝者に見られることのない背面の部分を彫らずに放っておくような癖があることなどを書き残している。しかし仕事とはいえ、これだけ多くの仏像を見てしまうと、さきほどの話と同様に「どこかで会った気がするのに」思い出せない、ということがしばしばおこる。

ヒトにも、もちろん地域の顔がある。女房も（もちろん私にそっくりの息子も）土佐人であるから、ぼんやりと土佐人らしいと思う顔の感じは想像できる気もするのだが、仏像ばかり見ている私にとっては、土佐の仏像の顔には割合としっかりとしたイメージができるものがある。そんなことを思っていた折に、京都の国際日本文化研究センターで古文書や美術資料の画像解析を研究している山田奨治助教授と出会い、「数量的手法による美術様式論の再構築」というテーマで共同研究を行なってきた。すでにその成果は浮世絵などをもとに、歌麿や春信といった美人画の名手達による女性像について、その輪郭、面相部の目鼻立ちのバランスなどを、様々な視点から数量的な分析を加え、その結果、最も典型的なその画家の美人画のイメージを描き出すことに成功している。

そこで私が思ったのは、たわいも無いことなのだが、私の中にある土佐の仏像のイメージを、先程の私のノートのような、いわば視覚と体感による直感的な方法ではなく、もう少し客観的な情報から、高知県の地域特性を説明できないだろうかということであった。早速、豊楽寺、定福寺、北川村の妙楽寺、馬路村の金林寺、安田町の中ノ川阿弥陀堂などに伝来する典型的な土佐の風貌を見せる仏像のうち、西暦の一一五〇年頃から一二五〇年頃までに制作されたと思われるものについて、浮世絵の時と同様な手法で合成し、大体、西暦の一二〇〇年頃の典型的な土佐のほとけさまの表情を再現してみたのがこの写真である。私には、高知のどこかであったことのある、オイチャンの顔のようにも見えるのだが、いかがなものだろうか。

【プロフィール】
青木淳先生は、一九六五年東京生まれ。日本美術史、特に仏像の胎内に遺された文物の研究がご専門。女子大では高知県地域文化遺産共同調査・活用事業プロジェクトを主宰し、県下各地の仏教文化財などの調査・四国遍路、茶堂、お接待に関する研究を精力的に行なっている。

常設展部分リニューアル

近世 ―近世の社会と文化―

四国八十八ヶ所霊場

岡本桂典

常設展示の一部リニューアルについては、第48号の6頁で簡単に紹介しましたが、今回は三階総合展示室、近世のコーナーに展示した「四国八十八ヶ所霊場」（写真1）の展示資料の一部について紹介したいと思います。

四国霊場が、いつ頃からできてきたのか。さらに、大師信仰が当初よりあったのか、まだまだ謎の部分が多いのが四国霊場です。

（写真1）総合展示室「近世の社会と文化」コーナー

さて、四国霊場の八十八ヶ所が成立した時期については、はっきりとはわかっていません。ただ、県指定の高知県土佐郡本川村越裏門（えりもん）地蔵堂にあった鰐口（わにぐち）※（写真2）に刻された銘文に以下のような文があります。

片面に「大日本国土州タカヲコリノホノ河　懸ワニ口福蔵寺エルモノ大旦那……」、もう片面に「大旦那村所八十八ヶ所文明三天　右志願者皆三月一日」とあります。銘文のなかに「村所八十八ヶ所文明三天」とありますが、「八十八ヶ所」は、四国霊場八十八ヶ所のことをさしています。「文明三天」とは、文明三年（一四七一）のことで「天」は年のことです。つまり、文明三年にはすでに四国八十八ヶ所霊場が成立していたことをこの鰐口の銘文は示しています。一四〇〇年代には、すでに八十八ヶ所巡りがあったということになります。

（写真2）鰐口（複製）

次に、中世の石造塔婆に残された遍路の足跡を紹介してみましょう。高岡郡中土佐町久礼（くれ）の久礼小学校西隣の学問坂に、高さ九〇cm、幅三三～三四cmの四国遍路の板碑（いたび）※（パネル展示）があります。板碑には銘文があり、「四國中邊路宛七度成就也敬白」「梵字（弘法大師）南無大師遍照金剛」「為美作國住圓心逆修也　天正十九辛卯季六月廿一日」とあります。一五九一年に四国遍路を七度成就した圓心が、自分の死後のために仏事を修して、冥福を祈るために造立したものです。中世の遍路板碑で四国遍路数度成就のものはこれのみです。

近世、つまり江戸時代の遍路関係資料についてみてみましょう。この時代の資料もあまり多く残っていません。遍路が霊場を巡った時に紙の札を納めますが、江戸時代には、紙や木、金属のものがありました。現在、高知市の土佐神社に隣接して百々山（どどざん）善楽寺がありますが、廃仏毀釈以前の江戸時代の土佐神社には、二つの神宮寺がありました。この寺に納経をしていました。

（写真3）納札

土佐神社からは、木製の納札が二枚見つかっています。一枚は（写真3）、長さ二七・六cm、幅六・四cm、厚さ〇・一mmで「奉納四州八十八ヶ所　仲遍路同行二人（その他略）」と墨書されたものです。上部に小さい穴があり、打ちつけられていたことを物語っています。霊場を巡ることを札打ちというのは、この納札を打ったことからきています。この他にも弘法大師の版木や納経帳、遍路関係の地図なども展示しています。

※鰐口（神社仏閣の軒先に懸け、参詣人が所願成就のために打ち鳴らす鳴器で扁平な円形の形状をしたものです）

※板碑（中世に供養塔あるいは逆修塔として造立された石造塔婆の一つで、一観面を原則とした塔婆です）

特別展「あの世・妖怪・陰陽師―異界万華鏡―」終了

七月一九日から八月三一日まで三八日間開催された特別展が終わりました。入館者数は二一、二七〇人に達し盛況でした。イベントを中心に同展をふりかえります。

↑死んだらどうなるか？
真剣に見る人々。

↑毎日２時間開業のからくり的。
カルチャーサポーターの皆さんが交替で担当してくれました。

入館者１万人目→と２万人目↓の御一行。どちらもステキな女性グループでした。

↑子供に人気の河童模型
「見て見て、お尻の穴が三つ～」

←作家の京極夏彦さん、妖怪研究家・村上健司さん、角川書店「怪」の編集者郡司聡さん（左から）。そうそうたる妖怪研究者のご一行も来館されました。

↑四国民俗学会と共催のシンポジウム「四国妖怪談義」
興味深い話が続々！

↑樋上潔さん作の民話おもちゃは、人気がありすぎて何度も修理をお願いしました。

↑民家から出張しての市原麟一郎先生の「土佐のおばけ話」。絶妙の語りに皆ひきこまれています。

↑シンポジウムに飛び入りして頂いたのは妖怪学のリーダー格・小松和彦先生。

↑講演会に引き続きシンポジウムにもご参加頂いた本展の仕掛人でもある常光徹先生。

↑最終日に、京都の晴明神社の氏子の方々が大挙当館に！山口喜堂宮司（右）と山口琢也祢宜。

↑いざなぎ流の小松豊孝太夫には、物部村独特の盆棚を作って頂きました。

特別展「あの世・妖怪・陰陽師」アンケート

お化けポスト便から

特別展期間中に、「お化けポスト便」と題して、来館者の方にお化けの話を書いてもらうアンケートを実施しました。約二五〇枚の回答が寄せられ、一部は三階ロビーに貼り出しました。その中から一部を紹介します。

「七人みさき　国分川の堤　冷たい気持ちの悪い風が首にふいた。その風にあたった人は病気になってねこむ。」

（一九三〇年頃、南国市、一〇代以下、女性）

他にも「けち火」や「カッパ」など伝統的なお化けもまま見られましたが、自分の体験談も結構ありました。

「学校の帰り道でした。いつも恐くて急ぎ足で通っていたお墓の前ですがその日はたまたまお墓の方を振り返ったのです。すると、左の端の上から二段目のお墓から上に向かってみどり色の光の玉がふわ～っと浮かび上がりました。恐くなってダッシュで家にかえりました。それ以来見ていませんが、そのお墓の近くではよくユーレイを見る人がたくさんいるそうです。」

（伊野町、二〇代、女性）

アンケートをやって一番ゾッとしたのは、歴民のある岡豊山が怪奇スポットだったことでしょうか。

「ここが昔岡豊山ハイランドだった時、宿直の人がよく見たそうです。カメラにもたびたび写ったらしく、奇怪な現象も数多く起こったそうです。私自身も恐い目にあった場所ですので、思い出してしまいました。」

（一九七六年頃、父から、二〇代、男性）

岡豊山にお化けが多い、という話は他の方からも寄せられました。でも、私はまだ見たことがありません。（今回結構残業もしたのですが…）忙しくてお化けを見る余裕も無かったのでしょうか。

（梅野光興）

土佐の民具12

アオダ（青駄）

坂本正夫

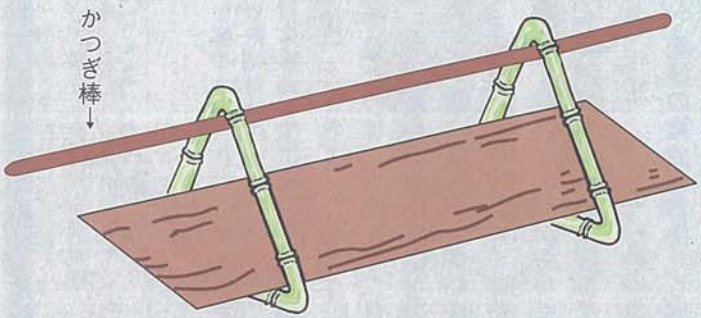
アオダは重病人や怪我人を運ぶ急造の担架のことですが、土地によってはトイタ（戸板）とかカキダイ（担き台）とも呼ばれていました。

図のように青竹を折り曲げ、雨戸や長持の蓋を敷いて、その上に病人を寝かせ、かつぎ棒をさして二人でかついでいましたが、竹は大火の上でよく焙ってから曲げていました。竹の太さにより、丸太のままで使用したり、二つ割りにしたものを使ったりしていました。なおアオダの語源は、青竹で作った即席の運搬具（青駄）という意味だろうと思います。

重病人や怪我人が出ると、昼夜をとわず村人総出で病人運びをしていましたが、搬送の中心になって働いたのは若連中（今の青年団）でした。多くの若い衆が付き従い、疲れると交代して担いでいました。

以前は無医村が多かったので、重病人は村外へ出て入院加療しなければならず、医者のいる所まで十五キロも二十キロもかかることは珍しいことではありませんでした。自動車や荷車の通行できる道路まで出るにも幾山も越えなければならず、災害で道路が決壊した場合は重傷者や急病人は死を待つよりほかありませんでした。

そのため、「祈れ、くすれ（薬れ）」の俚諺そのままに昔ながらの祈祷師に頼ったり、まじないや俗信、あるいは種々の民間療法によって病気を治そうとしていました。



考古　日高村小村神社

小村神社は、高岡郡東端の日高村下分小村に鎮座している。土佐の二の宮と言われ、小村大天神とも称する。この小村神社は、古墳時代後期の国宝の金銅荘環頭大刀が伝世されていることでよく知られている。また、神宮寺での来迎会の行道に用いられたと思われる菩薩面が三面伝世している。木造菩薩面の二面は、平安時代後期のものとされる面で国の重要文化財、もう一面は鎌倉時代の作とされている。さらに中世の蓬莱鏡二面が県の文化財に指定されている。棟札では、鎌倉時代の仁治元年（一二四〇）銘棟札一点、貞和三年（一三四七）銘の南北朝時代の棟札が一点、県指定となっている。当社には歴史を物語る多くの資料が伝世しているが、木製の江戸時代と考えられる狛犬が一点あることはあまり知られていない。頭部と脚が一部欠損しており座ることはできない。小村神社では、当館と協議し狛犬展示台を製作し、学芸員が展示指導し、文化財を後世へと、展示・保存に努めてくれている。

（岡本桂典）

新作の狛犬の展示台

歴史　堀見家の古写真

佐川町の堀見家より考古・歴史・民俗の各分野にわたり数多くの資料が寄贈されている。歴史分野の収蔵資料の中に、古写真関係の資料が五〇八点含まれており、その中には多くの湿板写真（アングロタイプ）がある。

湿板写真（アングロタイプ）は湿式コロジオン法が用いられ、透明なガラス板にコロジオン溶液とヨウ化カリ等の混合したものを塗布し、それを硝酸銀に浸すと感光性を持つガラス板ができる。ただし、乾燥すると感光性がなくなるので濡れているうちに撮影しなくてはならなかったので湿板と呼ばれた。一八五一年、イギリスのフレデリック・スコット・アーチャーにより発明された。

古写真資料の中には、坂本龍馬を撮影した上野彦馬の弟子、井上俊三の朱印がある桐箱と湿板写真、牧野富太郎の青年時代の写真も含まれている。写真資料は錦絵や絵図と違い、当時の服装や髪型などが鮮明に写し出されている。（泉誠司）

井上俊三の朱印がある桐箱と女性の写真

堀見恭作（左）
牧野富太郎（右）

民俗　えんこう？狛犬

上段の考古コラム「小村神社」の狛犬像ですが、これまで知られていなかったのも道理。この狛犬、神社では「えんこう像」とされていたのです。

私がこの像を初めて見たのは、平成五年二月、当館の史跡巡りの時でした。見るからに異様な姿、説明には「雨乞い用えんこう像　日照りつづく時雨を招く『えんこう』像」と書かれています。伝説の妖怪「えんこう」の像なんて聞いたことがありません。興奮するとともに何か機会があれば展示しようと心に決めました。そして十年。今夏の「あの世・妖怪・陰陽師」展という絶好の機会にお借りし展示することができました。

古文書に「旱魃の時出して祭ればたちまち雨が降る木像」が記されている（『土佐二ノ宮小村神社誌』）ことから、結構長い間この像は雨乞いの対象として信仰されてきたようです。狛犬が「えんこう」になったのはなぜでしょうか。日照りに雨を願う人々の切実な思いが強かったためと思われます。不気味な姿に「えんこう」への想像力をふくらませた近所の子どもも多かったことでしょう。民俗学の立場からは人々の思いを伝える「えんこう」の呼称もぜひ残してほしいものです。

（梅野光興）

「えんこう」とされていた狛犬

ワクワクワーク

障子貼りに挑戦しよう　10月25日（土）

障子貼り

歴民館の敷地内には茅葺き民家、旧味元家住宅があります。同住宅の障子貼りは、カルチャーサポーターが民家保存の一環として行なってきました。昨年からはワクワクワークのメニューになり、今年は一六名の方が参加しました。障子紙を切るところからの体験です。カルチャーサポーターから「障子を逆さまにして貼るとホコリがたまらない」等を伝授され、「昔の方の知恵が生きていると感心した」「ノリをぬるのが難しかったけど面白かった」等の感想が寄せられました。

（中村淳子）

収蔵庫の耐震対策を進めています

近頃、次の南海大地震への備えが叫ばれています。歴民館でも少しずつですが、地震対策を行なっています。

昨年度からは収蔵庫の棚からの資料の落下を防ぐ対策を行なっています。資料の落下防止が第一ですが、資料の出し入れのしやすさも重要です。そこで現在ある収蔵庫の棚にネットを張ったり、メッシュの引き戸を取り付けています。

学芸員として資料に細心の注意を常に払わなければなりませんが、工事の終了した棚に資料を収める度に一先ずホッと安堵します。

（曽我満子）

収蔵庫（考古）

ワクワクワーク　麦飯を炊いてみよう

十一月八日、小学生・幼児を含む参加者の皆さんにカルチャーサポーターも加わって岡豊山歴史公園内の民家の庭先で麦飯炊きを行ないました。

小学生が薪割と、家庭ではしたことがないという米研ぎにも挑戦しました。羽釜での飯炊きは初めてという参加者も多く、火加減が最大のポイントとあって火の番を担当したカルチャーサポーターの目は真剣そのものでした。着火後沸騰し吹きこぼれるまで強火、次に中火で五分、弱火で五分、蒸らしで一〇分。そして、待ちに待った炊きあがり。しかし、今回は少し残念な結果となりました。釜に対して米麦の量が多過ぎたようです。少し生米が混じっていてその場での試食とはなりませんでした。飯炊きは経験と勘を要する作業であることを改めて認識する機会となりました。

水加減はいいかな

今回は白米と大麦（押麦）を同量ずつで炊きましたが、県内でも地域ごとに麦の入る割合が異なっていました。かつては白米だけを食べるのは滅多にないことで庶民の憧れでしたが、今の私たちは白米のご飯を当たり前のように食べています。しかし、麦は白米と同量で比較すると低価格、低カロリー、食物繊維がたっぷり、また他の栄養素も豊富であり、健康にはとても良いことも学習しました。現代の食生活にも上手く取り入れていきたいものです。（曽我）

新刊

あの世・妖怪・陰陽師
―異界万華鏡・高知編―
展示解説資料集

今夏の特別展の解説資料集。荒俣宏・小松和彦・常光徹氏ら豪華執筆陣によるエッセイ。高知県の妖怪資料「土佐お化け草紙」「土佐化物絵本」のカラー写真（一部）・翻刻を収録。残部僅少。

A４判160頁　頒価1,300円（送料340円）

岡豊城跡・旧味元家住宅主屋パンフレット

岡豊城の歴史、発掘調査の成果、移築した民家・旧味元家住宅の紹介など、岡豊山歴史公園のくわしいガイドブック。好評のため一般販売開始。

オールカラー22頁
頒価230円（送料140円）

館受付で販売中。郵送希望者は送料とあわせて現金書留か郵便振込でお申し込み下さい。

口座番号　01610－2－61369
加入者名　㈶高知県文化財団

月・日	主な出来事
7．12	特別展のための臨時休館（１８日迄）
7．19	特別展「あの世・妖怪・陰陽師」開始
7．20	土佐のおばけ話①、展示室トーク①
7．26	講演会「異界と妖怪」常光徹氏
7．27	シンポジウム「四国妖怪談義」
8．2	土佐のおばけ話②、展示室トーク②
8．6	特別展入館者１万人達成
8．16	土佐のおばけ話③、展示室トーク③
8．30	土佐のおばけ話④、展示室トーク④ 特別展入館者２万人達成
8．31	特別展終了
9．1	資料撤収・復原のため臨時休館（8日迄）
10．4	カルチャーサポーターの会
10．25	ワクワクワーク・障子貼りに挑戦しよう
11．1	史跡巡り・徳島
11．8	ワクワクワーク・麦飯を炊いてみよう

ひとこと

夏の「異界」展は、初めて歴民に来られた方も大勢いらっしゃいました。これからも魅力ある企画にチャレンジしたいと思っています。

岡豊風日（おこうふうじつ）第49号
平成一五年一二月一日
編集・発行　高知県立歴史民俗資料館
〒783－0044　南国市岡豊町八幡１０９９－１
TEL　０８８－８６２－２２１１
FAX　０８８－８６２－２１１０

開館時間　午前9時～午後5時（入館は午後4時30分まで）
休館日　毎週月曜日（祝日及び振替休日にあたる場合は翌日）12月28日～1月4日、臨時休館日あり
入館料　通常期［常設展］大人（18歳以上）450円・団体（20人以上）360円
無料：高校生以下、高知県及び高知市長寿手帳所持者、療育手帳・身体障害者手帳・障害者手帳・戦傷病者手帳・被爆者健康手帳所持者とその介護者（1名）

印刷㈱飛鳥

http://www2.net-kochi.gr.jp/~kenbunka/rekimin/
E-mail:rekimin@tosa.net-kochi.gr.jp

平成15年12月～平成16年3月の催し物

企画展

石の仏
―土佐の石造美術Ⅰ―

平成16年3月5日㈮～5月23日㈰

今回の企画展では、従来全く光の当てられていない土佐の石仏や石造塔婆などを取り上げました。石造塔婆は、地表に造塔された信仰の対象物です。展示室への展示には極めて無理があります。そこで、石造物の拓本や写真、一部実物資料を展示し、土佐の石造塔婆や石仏を紹介し、忘れられつつある石造文化遺産に関心を持っていただくため企画しました。

講演会

平成16年3月20日㈯　13：00～16：20（会場：AVホール）

「中世・土佐の石造物」　13：00～14：15
中土佐町文化財保護委員　林　勇作氏

「土佐の石仏―その特徴と課題―」　14：15～15：30
日本石仏協会理事　岡村庄造氏

小シンポジウム　～土佐・中世の石造塔婆～　15：40～16：20
林　勇作氏・岡村庄造氏　司会：当館学芸課長　岡本桂典

＜葉書かＥメールでお申し込み下さい　先着100名＞

展示室トーク

平成16年３月６日㈯　14：00～15：30
（会場：企画展示室）

＜お申し込みは不要です＞

ワクワクワーク

土佐民話の家⑫　お地蔵さんの話

講師：市原麟一郎氏

平成16年3月7日㈰　14：00～15：00（会場：AVホール）

＜電話かEメールでお申し込み下さい　先着順＞

史跡めぐり

東予・松山周辺の史跡　―古戦場巡り③―

平成16年3月13日㈯

第１回目の中富川古戦場、第２回目の恵良沼古戦場に続き、金子山城とその周辺の古戦場、及び金子元宅の菩提寺慈眼寺を訪ねます。また河野氏の本拠地湯築城跡にも足を延ばします。ご期待ください。

＜専用申込書をご請求ください。＞

企画コーナー（民俗展示室）

おひなさま

平成16年1月30日㈮～3月13日㈯

城田政治さんの郷土玩具コレクションを紹介する恒例の雛人形コーナー。凧になったおひなさまや指先大の小さなものなど約20点を展示。

臨時休館のお知らせ

平成15年12月22日㈪～27日㈯　燻蒸休館
平成15年12月28日㈰～平成16年1月4日㈰　年末年始休館